

バッハとモーツァルト-2

2. モーツァルトはバッハから何を学んだのか

(1) バッハとの出会い

ついつい前置きが長くなりました、ここからが本題です。といっても前回のお話が無駄だったとは思っていません。ことモーツァルトに限らず、後世多くの作曲家・演奏家・学者がバッハに注目し、インスパイアされて作・編曲、演奏し、(前号では触れていませんが)作品研究を行い、その作業は没後 265 年になる現在も絶えることなく続いている、ということを書いたかったのです。バッハ以後、およそ西洋音楽の技法による作曲を志す者で、バッハを意識したことがない人はいないのではないのでしょうか。それほどバッハという存在は大きな規範となっています。筆者の知る現役の作曲家も「無伴奏フルートとチェロのための作品を書いたとき、バッハの無伴奏フルートソナタ、チェロソナタを意識しないわけにはいかなかった」と吐露しています。

その中でもモーツァルトは、バッハの息子たちを除いて最初にその影響を受けた作曲家の一人(他にも今は忘れ去られた人物がいれば、の話ですが)ではないのでしょうか。前回もお話したとおりバッハは生前、ザクセン地方で活躍した教会音楽家・オルガン奏者という以上の名声は得られず、批評家からはすでに彼の時代には流行遅れであった対位法の作曲家として敬遠もしくは批判され、死後、勤め先であったライプツィヒ聖トーマス教会の外では急速に忘れ去られた存在でした。

しかし同時代のウィーンにアマチュアながら音楽の愛好家で自身も作曲する外交官、ゴットフリート・ヴァン・スヴィーテン男爵がいたことはモーツァルトにとって大変な幸運でした。男爵によってもたらされたバッハの筆写譜は、後の伝記作者が「バッハ(・ヘンデル)体験」と名付けたほど大きなインパクトを与えました。(第5号をご参照下さい)

言うまでもなくモーツァルトは作曲技法としての対位法を知らなかったわけではなく、幼少時には父レオポルトから、第1回イタリア旅行の折り(1770年、モーツァルト14歳)にはボローニャで当代随一の音楽理論家・作曲家として有名なジャンバティスタ・マルティーニから二度にわたってフーガの作曲指導を受けています。しかしこれは作曲家が学ぶべき音楽技法の一つとして習得したものであったらしく、その後彼が対位法の音楽に夢中になった形跡はありません。しかしバッハの対位法音楽はモーツァルトを有頂天にさせたのです。彼は父に宛てて「ぼくは毎週日曜日12時に、ヴァン・スヴィーテン男爵の所に行きます。－そこではバッハとヘンデル以外は演奏されません。－ぼくはバッハのフーガを集めています」(1782年4月10日付け)と書いています。

(2) ヴァン・スヴィーテン男爵のバッハコレクション

樋口隆一著「バッハ探求」(1993年、春秋社刊)の中に、「バッハとモーツァルト」という一章があります。それによるとヴァン・スヴィーテン男爵はオーストリアの大使として、最後の任地となったプロイセンの首都ベルリンに1770年から7年間滞在しています。ここには音楽愛好家(カール・フィリップ・エマヌエル・バッハを宮廷楽団のチェンバロ奏者として雇い、父である大バッハを招いて「音楽の捧げ物」の献呈を受けた)としても有名なフリードリヒ大王が君臨し、その妹アンナ・アマリアのサロンで盛んに音楽が演奏されていました。アンナ・アマリアの音楽顧問はバッハの弟子の中

でもゴルトベルクやクレープスと並んで有名なヨハン・フィリップ・キルンベルガーでした。彼は師匠であるバッハの楽譜をベルリンに集め、またバッハの長男ヴィルヘルム・フリーデマンもこの都市で父の作品を弟子の貴族たちに売ったりしていました。これらがアマーリアの図書館に収蔵され、バッハコレクションとなります。(筆者が一部の文言を補いました)

男爵は任期中ずっとこのサロンに属していて、コピスト(写譜屋)を雇ってはバッハやヘンデルの作品を精力的に筆写しました。この間彼はカール・フィリップ・エマヌエルと親交を結び、作品の献呈を受けています。

それではヴァン・スヴィーテン男爵がウィーンに持ち帰ったバッハ作品にはどんなものがあったのでしょうか。以下にその一覧をお示しします。*印は原佳之「フーガがモーツァルトの後期クラヴィーアソナタに与えた影響」(『音楽文化研究』第2号 聖徳大学人文学部音楽文化研究会 2003年)によりました。なお、原によれば「男爵はカール・フィリップ・エマヌエルから楽譜(筆写譜と印刷譜)を購入した」とあります。また、樋口はこれらの他に「マタイ受難曲」もあったのではないかと推測しています。いずれにしてもスヴィーテン・コレクションには鍵盤楽器のための作品が多いのが特徴といえましょう。

6曲のパーティータ BWV 825-830

クラヴィーア練習曲集第3巻 BWV 552, 669-689, 802-805

インヴェンションとシンフォニア BWV 772-801

音楽の捧げ物 BWV 1079

小さな和声の迷宮 BWV 591

プレリュード BWV 568

フランス組曲 BWV 812-817

平均律クラヴィーア曲集第2巻からフーガ ロ短調 BWV 886

フーガ イ短調 BWV 944

フーガ ロ短調 BWV 951

フーガ ニ短調 BWV 539

イギリス組曲 BWV 806-811

トリオソナタ BWV 525-530

マニフィカト ニ長調 BWV 243

フーガの技法 BWV 1080*

それにしてもヴァン・スヴィーテン男爵という人は大変な「音楽の目利き」ですね。鍵盤用の作品が多いのは、男爵自身が演奏する目的で集めたからかも知れません。礒山雅は著書「モーツァルト 二つの顔」(講談社選書メチエ 2000年)で「バッハの音楽との出会いがなかったら、モーツァルトの晩年の音楽は、何ほどかの深みを欠くことになったのではないかと思われる」と書いています。だとすれば男爵はモーツァルトにとって大恩人ということになりますね。(次号に続く)

【後記】 訂正があります。

第8号「ハ短調ミサ曲はどのようにして書かれたのか-4」の6. 未完の理由 12行目、「ハ短調ミサ曲の初演(1783年10月21日)」は「(1783年10月21日)」の誤り、第9号「バッハとモーツァルト」の1. バッハの家系 2行目、「ファイト・バッハ(1577年没)から数え終えて4代目」は「ファイト・バッハ(1577年没)から数えて4代目」の誤りです。お詫びして訂正致します。

次号ではモーツァルトがバッハの影響下に作・編曲した楽曲をご紹介します、併せてハ短調ミサ曲に現れたバロック的、対位的な特徴をお示ししたいと思います。(新井)